

専修念仏のともがらの、わが弟子ひとの弟子、という相論のそうろうらんこと、もってのほかの子細なり。親鸞は弟子一人ももたずそうろう。そのゆえは、わがはからいにて、ひとに念仏をもうさせそうらわばこそ、弟子にてもそうらわめ。ひとえに弥陀の御もよおしにあずかって、念仏もうしそうろうひとを、わが弟子ともうすこと、きわめたる荒涼のことなり。つくべき縁あればともない、はなるべき縁あれば、はなるることのあるをも、師をそむきて、ひとにつれて念仏すれば、往生すべからざるものなりなんどいうこと、不可説なり。如来よりたまわりたる信心を、わがものがおに、とりかえさんともうすにや。かえすがえすもあるべからざることなり。自然のことわりにあいかなわば、仏恩をもしり、また師の恩をもしるべきなりと云々

第6章 弥陀の御もよおし

第2組 清浄寺住職

波佐谷 宏昭

text by Hiroaki Hasatani

はじめに

『歎異抄』第六条は、まず、ひたすら念仏に生きる仲間の中で、「わが弟子ひとの弟子」という言い争いがあるのは、もってのほかのことであるといわれます。そのような厳しい言葉を使われているのは、仏の教えに生きようとする者が言い争いをするのは見苦しいということではなく、「わが弟子ひとの弟子ということの問題にするのは、念仏の信心とは違う」ということなのであります。

弥陀の御もよおし

親鸞聖人は、「親鸞は弟子一人ももたずそうろう。」（親鸞は弟子を一人ももっていません）とおっしゃいました。実際には、親鸞聖人を師と仰ぐ弟子がたくさんいたと思われませんが、「親鸞は弟子一人ももたずそうろう。」とおっしゃったのです。「弟子一人ももたず」とおっしゃる理由について親鸞聖人は、念仏申す身と定まったのは、「ひとえに弥陀の御もよおし」によるものであり、念仏の信心も「如来よりたまわりたる信心」だからだとおっしゃいます。私の計らいによって、念仏申す身とさせたのであるならば弟子と言えるかもしれないが、ひ

とえに阿弥陀如来のはたらきによるものなので、それを自分の手柄にして「わが弟子」というのはもってのほかであるとおっしゃったのです。

如来と出遇う

念仏を申す身となるとは、阿弥陀仏の本願に出遇うということです。阿弥陀仏の本願に出遇うとは、一切衆生をもらすことなく救い遂げたいという「阿弥陀仏の慈悲」と、人間の迷いを迷いと知らせる「阿弥陀仏の智慧」に領くということでありましょう。「智慧」とは、物事をありのままにとらえ、真理を見極める認識力です。私達が如来の智慧に領くということは、ありのままの自分を知らされると同時に、いかに自らの虚妄分別（思い計らい）によって、ありのままを見失っているかということをおぼえ知らせられるということです。ありのままの自分を知るとは、深くて広い、量り知れない「縁」を内容としている「私」を知ることであり、誰とも比べる必要の無い、かけがえのない「一人^{いちにん}」として在る「私」であることを知るということです。しかし、私達は「私」に執着し、自分と他者を比較しては、「勝った」「負けた」、「上だ」「下だ」と、人間に優劣、上下がある虚構の世界を造っていきます。そのことによって、誰しものが、他と比べることの出来ない、かけがえのない「一人^{いちにん}」であることを見失っていくのです。

そのような私達に、「自他は一つの如くであり、平等である」という事実を目覚めさせようと、はたらいて下さっているのが阿弥陀仏の本願です。

名利に人師をこのむなり

「わが弟子、ひとの弟子」と言い争うのは、少しでも自分を立派に見せたいという「名利心」そのものです。ともにひたすら念仏申す仲間でありながら、「名利心」に振り回されている「自分」が問題になっていないことに対して、宗祖は厳しい言葉を述べたのでありましょう。

「弟子一人ももたず」とおっしゃった親鸞聖人は、86歳の時に「是非知らず邪正もわかぬこのみなり 小慈小悲もなけれども 名利に人師をこのむなり」（聖典511頁）とお書きになりました。名利を好み、師になろうとする我が身が如来の智慧に照らし出されては、「ああ、そうであった」と、法然上人の教えに帰続けた御生涯だったのではないかと思われまます。